

坂本直乙子 提出 学位申請論文（課程博士）

『琉球列島の祭祀にみる神馬の研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、「神馬とは何か」などの問題について、琉球列島の祭祀を手掛かりに論じたものである。

第一章「神馬の研究について」では、神社に奉納されたり、神の乗用に供される馬を「神馬」と一般的に呼称されるが、改めて「神馬とは何か」「馬はなぜ神の乗りものなのか」と問われると、その答えは漠然としていると指摘。そのような課題に答えるための一試論として、琉球列島において馬を用いた祭祀を対象に考察することが目的という。次に、神馬の意義解明に関する先行研究を多数紹介。その中で、佐藤虎雄「神馬の研究」を基礎的研究成果と位置づけるが、氏の研究

も歴史を主体としたもので、論者の課題究明の答えとしては不十分と評価する。終りに本論文の構成に触れ、第二～第七章までの大意を述べている。

第二章は「伊平屋島・田名海神祭の騎馬行列」と題し、琉球祭祀の古い形態を留めると言われる海神祭の、特に「ヌイシジチ」と称する神女の騎馬行列を中心に考察している。『琉球国由来記』記載の海神祭と田名海神祭の復元祭祀を比較すると、両者はほぼ一致し、田名海神祭が古態を継承していることを確認する。また海神祭は海神の神迎え神送りと理解されてきたが、神女の騎馬行列は「海神船団の群行」を表わす祭儀であり、海神は武器を持つ弁才天を表象する「武神の姿」であると推考している。

第三章「久米島の馬乗石」では、馬乗り神と呼ばれた神女らが用いた「馬乗石」とはどのようなものを調査し、三つの用途が推測されると報告する。ウマチーと称される麦穂祭や稲大祭などの祭祀儀礼の際に、かつて神女は馬に乗って集落の祭場を巡ったと伝えられてきた。しかし現在は、祭祀儀礼を担ってきた神女達

は高齢化や継承者難によって儀礼が簡略化されている地域が多く、神女らによる祭場巡りの伝統も消失状態にあり、十分な調査研究が困難であるという。そういう状況の中で論者が推測する「馬乗石」の二つの用途は、次のようなものである。第一は現状の調査ではなかなか確認し難いが、伝承や名称から推測されるのが、神女らが乗馬するための「踏み石」であったという捉え方。第二は、かつて祭場において神女らが神歌を歌った時に、ノロだけが座ったり背中をもたれさせたりする石であったのではないかという推察。第三は、御神酒がかけられる石としての用途も実見されることを考えると、神が降臨する磐座的要素も否定できないが、引き続き検討すべき課題という。

第四章は「『おもろさうし』にみる乗り馬」と題し、琉球列島の古代歌謡集に登場する馬に対して敬意表現がとられている理由について考察している。『おもろさうし』一五五四首のなかで、「うま」が含まれるおもろは二十首、そのうち「乗り馬」のおもろが十二首ある。十二首の乗馬唄を、外間守善・波照間永吉著

『定本おもしろさうし』・外間守善校注『おもしろさうし』を基軸に、伊波普猷著『おもしろさうし選釈』・仲原善忠著『おもしろ新釈』・鳥越憲三郎著『おもしろさうし全釈』・清水晃著『標音おもしろさうし注釈』の四冊を参照して検討。その方法としては、始めに乗馬唄の要旨を示し、「①どのような馬か②誰の乗馬か③何のためか④何を祈願するおもしろか」などを抽出する作業を行なっている。その結果、『おもしろさうし』に登場する乗馬の多くは、島の統治や守護のために支配者や神女達が威儀を正し武装して乗るものであると推考する。その上で、おもしろ馬に敬意表現がとられている理由については、「1. 乗馬者が貴人に由来すること、2. 乗馬者の力や威光を強化するような働きを馬が担うこと、3. 乗馬者の迅速な移動が、馬の足の速さによって実現できること」の三点に整理している。

第五章は「琉球列島の説話にみる『馬』に対する観念」と題し、琉球列島において馬がなぜ神聖視されたかの要因を探求しようとする。考察上の資料として、源武雄編著『沖繩の伝説』・新城明久著『沖繩の在来家畜・その伝来と生活史』・

高良鉄夫著『馬と語る・馬を語る・愉快で不思議な馬ものがたり』・遠藤庄治編『おおぎみの昔話』同編『粟国島の民話』など十数冊の琉球列島の説話や文化誌などを挙げる。それらの書物を基に馬が備える性格として、「駿足」「美しい姿」「貴重な価値」「人馬一体化」「人と意思疎通が可能」「従順」「優れた記憶力」「豊かな感情」「危険を察知・回避」「荒れると制御不能」「馬力（大きな力）」「泳ぎに優れる」「水陸を両行する」「持久力がある」「帰巢本能」「闘争本能」「防衛本能」「旺盛な精力」「種馬の性（雄性）」の十九の性格を提示。そして以上のような馬に対する見方から、馬がなぜ神聖視されるかの要因を、「1. 貴重な価値（財産） 2. 優れた運動能力 3. 鋭い感知能力 4. コミュニケーション能力 5. 人馬一体化 6. 溢れる精気」の性格に求めている。

第六章「聞得大君の神馬と乗馬」においては、琉球国の最高神女である聞得大君の神馬とはどのような馬かを検討し、大君が即位式の際馬に乗る理由を考察。聞得大君御殿の神壇には、大君が祀る香炉が置かれ壁には掛物があり、その絵の

中央に女神像、下に白馬が描写されていた。掛物は弁財天と呼称されてきたが、論者は掛物を祀る御殿側がこれを祖神像と捉えていること、又折口信夫が香炉は神を祀るものであり家の創立者を拜むための媒介物と主張していることなどから、女性祖神像と推論している。続いて聞得大君が乗る馬の毛色については、『女官御双紙』『琉球国由来記』『聞得大君加那志御新下日記』などを参照しながら、白色系統の若馬と推測。終りに、聞得大君が何のために即位するのかを推考し、大君が何故馬に乗るのかその理由を検討する。十六世紀の『使琉球録』や『おもろさうし』の歌謡などを拠り所に考えると、国王に降りかかる災難や悪事を事前に察知し、内外の敵を駆逐し、国や国王を守護することが第一義であった。その意味で軍神・聞得大君のために貢献する軍馬の意義を有すると推考している。

第七章「神馬とはなにか」において、「一、神馬とはなにか 二、神馬の特徴 三、馬から神馬へ」の三節に分けて論じている。第一節では第二章・第四章・第五章・第六章で推論した要点を論拠に、「琉球列島の祭祀にみる神馬とは、精

気の具象であり、島嶼の守護に資する軍馬」であると結ぶ。第二節においては、神馬の特徴として、神から下された特別な馬（毛色などに特徴あり）「しんば」と人間が神に捧げる馬「じんめ・しんめ」という二つの神馬があるという先行研究を、両者の相違は神と人との間における馬の移動の方向性と捉え、これを神に對するへ下りゝとへ上りゝの二系統に整理。その上で、琉球祭祀にみる神馬は、神から人への下りものの馬「しんば」が、神の乗りものになることによって「じんめ・しんめ」になるという両義性がみられること、および両者の永続的な循環性が推測できると主張している。第三節では、馬は自ら神馬になるのではなく、特定の馬に神の記号を見出す人や、馬を洗い清めて飾る人の働きによって神馬に変わると指摘。馬の準備と潮の干満との関連性、手綱と船綱との類似性などから、神馬の祭祀は船に乗る人の信仰と関わることを推察する。終りに、馬を神馬に変える人が居る限り、神馬は神と人との間を往来するであろうと結びに代えている。

論文審査の結果の要旨

本論文の研究目的は、「神馬とは何か」および「馬はなぜ神の乗りものなのか」という素朴な疑問から出発している。「神馬とは何か」を探求しようとするれば、神馬と呼ばれる事象を調査蒐集しなければならないが、先行研究として佐藤虎雄論文「神馬の研究」があり、その問にある程度答えている。同氏は『古事記』『日本書紀』『続日本紀』『古語拾遺』『皇太神宮儀式帳』など諸文献から神馬に関する事象を抽出し歴史学的解説をほどこしており、論者も本格的な神馬研究の成果と評価する。しかし「馬はなぜ神の乗りものなのか」の問に十分答えていないという。もちろん馬は人間の乗りものであるから、神の乗り物になったという解答で満足していれば、この問は発せられなかった。論者は元馬上で弓を引く武道・弓馬道の門下生として、流鏑馬神事に携わる中で祭祀に馬が用いられることに関心を抱いた。馬に長年接して馬への関心から、祭礼で用いられる馬を研究した

いと考えた。神道研究者の一般は祭祀に関心があつて馬が使用されていることに関心を向けるが、馬に関心があつて祭祀に関心に向けた論者と発想に相違があつて当然であろう。

研究方法については、これまで明示したように、琉球列島における祭祀に用いられる神馬に着目。琉球祭祀に注目することによって、一つの利点があるという。

一、神が人間（女性）に直接降臨するため、神の乗物を実際に見たり、記録上の確認が取れる。二、顕現化する神が女性であるため、馬に乗る神女の意義を検討することが可能である。それによって、「神馬とは何か」や「馬はなぜ神の乗りものなのか」を考察することが可能であると主張。日本列島の神道祭祀と琉球祭祀には、相違があることは言うまでもないが、折口信夫の神観念や他界観の構築には、沖縄にみられる祭儀や習俗から示唆を得たことは否定できない。その意味でも、本論文の研究方法に基づく成果は、今後の神馬研究上、何らかの貢献が期待される。

琉球列島における祭祀は、儀礼を担ってきた神女達が高齢化や後継者難のために、祭祀そのものが変容しているというのが実情であろう。又乗馬についても、現在沖縄で祭祀に使われることが無くなって、車による移動を余儀なくされている。そのため論者の研究対象も、記録を主体とした文献に頼らざるを得なかった。そのような状況の中で、なぜ馬なのかを執拗に追求しようとした姿勢が、神馬に関する新しい見解を提起する要因になったと思われる。本論文において新見解と考えられる仮説を、重複を厭わず掲げてみたい。

第一に、海神祭における騎馬行列は、弓を携える騎馬部隊を編制して行進する軍馬であること。又『おもろさうし』に見える乗り馬の歌謡を分析すると、農耕用の役馬は登場せず、島の統治や守護のための支配者および神女が乗るための馬であった。その意味では、古代歌謡にみられる乗り馬は、神女の乗馬も含め島の平安に有益な討伐用の馬であったと言える。更に聞得大君は国を守護する軍神であると捉えることが可能であれば、大君の乗る馬は軍馬と推考してよからう。こ

れらを論拠に、琉球列島の祭祀にみる神馬は島嶼の守護に資する軍馬であると提起している。

第二に、伊平屋島の田名海神祭における神女の騎馬行列（ヌイシジチ）は、昭和四十年代まで残っていたと言われるが、現在は馬の代りに車による移動である。但しそこでは、馬の鞍が重要な祭具として扱われている。前述したように、騎馬行列は神迎え神送りと解釈されてきたが、「海神船団の群行」を表わすと推考。とくに海神は弁才天に由来する武器をもつ女神であることを強調する。同様に聞得大君の即位式である御新下りにおいても、神となる大君は鎧と刀を身につけ、琉球国を守護する軍神という見方ができると推論する。琉球祭祀における神観念について、新たな仮説を提示したと言えよう。

第三の仮説として提起しているのは、次のような見解である。馬を神馬に変えるのは、馬自身ではなく変える人がいるからだ。その人が馬を飾り手綱を取る「馬引き」である。馬引きにとっての神とは何かが推測できれば、神馬祭祀の原

義を理解することが可能と主張。海神祭や御新下りの騎馬行列を検討すると、同じ乗り物という共通性がみられ、馬は陸上の船に見立てられるという。馬引きの取る「手綱」に重要な意味があり、馬を船と見れば、馬の手綱は船を繋ぎ留めるための「とも綱」に相当する。そして神女を馬に乗せるという行為は、船に船霊を戴くという着想からきているという。結論として騎馬行列ではあるが、馬を船に見立てた航海が観念された儀礼であり、このような祭祀の形は船に乗る人々の信仰から来るのではないかと推考している。

以上のような新見解を展開した本論文は、学位申請論文にふさわしいと言えるが、若干の問題点および今後の課題について触れておきたい。本論文の問題点としては、第一章において先行研究の業績を多数蒐集して紹介するのは良いが、研究成果の紹介の仕方が並列的であり、神馬に関する研究の現状がどのようなものかがわかりにくい。一工夫あるべきであろう。今後の課題は、佐藤虎雄氏が指摘した古代日本の神馬と琉球祭祀の神馬との関連の有無、たとえば祓へつ物として

の神馬や神の怒りを鎮めるために奉獻する神馬など例があるのか無いのか。又論者も述べているように、世界の各地域にみられる神の馬との比較研究も有意義な作業となろう。

本論文は、先行研究の整理上、いささかの瑕疵はみられるが、本論文の申請者坂本直乙子は、博士（神道学）の学位を授与せられる資格があると認められる。

平成二十六年二月十五日

主査	國學院大學大学院客員教授	安蘇谷 正彦	印
副査	國學院大學教授	小川 直之	印
副査	國學院大學教授	渡邊 欣雄	印